国語研の窓 35号

平成20年４月１日　第35号　発行　独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集　国立国語研究所管理部総務課
普及広報担当グループ
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
電話　042-540-4300　FAX　042-540-4334
URL　http://www.kokken.go.jp/



第１回公開講演会（昭和25年１月28日開催）

もくじ

暮らしに生きることば　1
創立60周年を迎えて　2
刊行物紹介：
　新「ことば」シリーズ21『私たちと敬語』　3
『日本語ブックレット2006』紹介　4
公開研究発表会報告　5
コラム　6
文字さんぽ　7
表紙のことば　7
お知らせ　8
新刊　8

暮らしに生きることば

日本語の達人てどんな人？

「日本語の達人」というとどのような人を想像するでしょうか。難しい漢字をたくさん知っている人，言葉遣いの美しい人，文章の巧みな人，多くの情報を短時間で読みこなす人，いつも必要十分で心地よいコミュニケーションの取れる人，聞き上手な人…さまざまな人物像が浮かびそうです。

このようにさまざまな「達人像」が描けるのは，日本語そのものにも，日本語の使われ方にもいろいろな側面がある上に，その中の何を特に大切なものと捉えるかが人によって違うことによると考えられます。

国立国語研究所では，このように多面的で考え方も多様な，日本人の日本語の力，すなわち「国語力」に関して，国民がどのように捉えているかを探るための調査（「国語力観」調査）を行いました。対象は15歳以上の国民約2,000人，実施は平成18年でした。

この中で，いわば「達人像」にあたる，「国語力がある人」と感じるのはどんな人か」をたずねたところ，「考えをまとめてきちんと文章を書ける人」(54.9%)，「文章を読んで内容を的確に理解できる人」(43.2%)が上位を占めました。文章を書く･読むという書き言葉に関する力が重視されています。

一方，少し質問の角度を変えて，「あなたが毎日の生活の中でしたいこと」をたずねると，「考えをまとめてきちんと文章を書きたい」(41.5%)はやはり１位ですが，「上手に話して説明したり発表したりしたい」(31.7%)，「言葉でのコミュニケーションを通じてよい人間関係を作りたい」(30.9%)が続きます。自分のこととなると，今度は，話し言葉を含めた発信の言語活動がクローズアップされることがわかります。

「国語力」ということを考える上では「どのような立場からどのような側面に光を当てて捉えるか」を意識することが，重要であると考えさせる結果です。

ところでこの調査では，「国語力」を100点満点で自己採点してもらいました。平均点は47点（みなさん謙虚なのでしょうか）。読者の方々の自己採点はいかがですか。その時，どんなことを重視して採点しましたか。

（三井 はるみ）

創立60周年を迎えて

＜変わったこと＞

国立国語研究所は，今年，創立60周年を迎えます。設置を根拠付けた『国立国語研究所設置法』が昭和23（1948）年12月20日に公布され，即日施行されて60年。人で言えば，還暦の年回りですから，一つの大切な節目です。

この60年間，国立国語研究所は，さまざまな変化を遂げてきています。

例えば所在地。現在の立川市緑町は４か所めです。明治神宮外苑，神田一ツ橋，北区西が丘と東京都区内を移転したのち，多摩地区に移りました。

制度の面での変化もありました。設置の根拠となる法令が前記の単独法から文部省組織令という政令に変わったり，所轄官庁が文部省から文化庁に変わったり，さらに省庁の所轄研究機関から独立行政法人に変わったりした変化です。

社会の変化に伴って，研究の内容や領域も変化しました。例えば，創立当時には想像すらできなかったコンピュータが出現し，とりわけ研究手段の面で大きな変化をもたらしました。近年進めている大規模な言語データベース作りの研究事業も，この展開の中に位置付くものです。また，日本語を母語としない多くの人たちが国の内外で日本語を求める時代が進展する中で，研究所は1970年代半ばから日本語教育の研究事業を担い始め，その後30年以上，この領域での蓄積を続けて現在に至っています。

＜変わらなかったこと＞

さまざまな変化を遂げた研究所ですが，しかし，創立以来変わらずに一貫していることもあります。

例えば，国立国語研究所は創立のころから，所の内外に及ぶ共同研究を実現させてきたことがそれです。人文科学にはなじみにくいとされがちな共同研究ですが，全国規模の方言地理学的な研究，大量のデータを対象とした計量言語学的な研究，多人数を対象とした社会調査手法による言語生活調査など，国立国語研究所が共同研究体制によって開拓し成果を挙げた研究領域は数多くあります。

研究体制よりも基本的なことがらで，創立以来変わらず一貫しているのは，研究所の任務の在り方です。60年前に公布・施行された『国立国語研究所設置法』第１条に掲げられた研究所の任務は次の通りです。

「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い，あわせて国語の合理化の確実な基礎を築くために，国立国語研究所を設置する。」

この任務規定は，前に挙げたような制度面での変化の節目を越えて，長く持続されました。

平成13（2001）年に国立国語研究所は独立行政法人となったのですが，その根拠法である『独立行政法人国立国語研究所法』においても，研究所の任務の在り方・構造は，基本的には変わっていません。この法律の第３条は次の通りです。

「独立行政法人国立国語研究所は，国語及び国民の言語生活並びに外国人に対する日本語教育に関する科学的な調査及び研究並びにこれに基づく資料の作成及びその公表等を行うことにより，国語の改善及び外国人に対する日本語教育の振興を図ることを目的とする。」

一貫して変わらないと強調したいのは，「国語及び国民の言語生活（並びに日本語教育）に関する科学的な調査及び研究」を行うことを掲げている点です。「あわせて国語の合理化の確実な基礎を築く」の「あわせて」という表現，あるいは「…を行うことにより，国語の改善（及び日本語教育の振興）を図ること」の「…により」という表現は，国語研究所の任務や目的の中で「科学的な調査及び研究」を中心・基盤に位置付けていることを表しています。

＜これからも＞

「研究所」であるからには，「科学的な調査及び研究」を任務の中心あるいは基盤に位置付けるのは当たり前と言うべきかもしれません。

しかし，創立60周年を迎え，私なりにその歴史を振り返るとき，この任務の在り方・構造は，改めて積極的な姿勢で吟味し，その実現に向けて引き続き力を尽くすべきものだと強く感じます。

＜変わったこと＞を見過ごさないこと。それと同時に＜変わらなかったこと＞を吟味し続けること。創立60周年を機に，所員一同，それぞれの持ち場で，そのような視点で自らの仕事や勤務先を振り返り，将来を見据えたいと念じます。

国立国語研究所が御縁をいただく多くの皆さまには，引き続き，御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

（所長　杉戸 清樹）

刊行物紹介

新「ことば」シリーズ21『私たちと敬語』

国立国語研究所編，ぎょうせい刊

■新「ことば」シリーズとは

国立国語研究所では，国民の皆さまに日本語について興味や関心を持っていただく目的で，『新「ことば」シリーズ』という普及書を毎年刊行しています。一般書店で販売するとともに，全国の学校や公民館等への無償配布も行っています。



本書は，一般書店で購入できます。
新「ことば」シリーズ21『私たちと敬語』
ぎょうせい，A5判128ページ
定価500円（税込）

■シリーズ21のテーマ

今年３月発行の『新「ことば」シリーズ』21は，平成19（2007）年２月に文化審議会から「敬語の指針」が答申されたことを受けて，テーマを「私たちと敬語」としました。私たちの言語生活に身近な敬語，しかしその一方で難しさも伴う敬語について，改めて考えます。

■内容

①巻頭エッセイ「敬語は社会性の中にある」

日本語についての執筆も多い作家・清水義範氏によるエッセイ。

②座談会「敬語の働きと難しさ」

NHK「ラジオ深夜便」で番組ゲストや聴取者と日々言葉を使って仕事をしているアナウンサー・宇田川清江氏と，敬語コミュニケーションの研究を専門とし文化審議会国語分科会委員及び敬語小委員会副主査を務めた早稲田大学教授・蒲谷宏氏においでいただき，敬語の働きと難しさについて語っていただきました。司会は国立国語研究所長・杉戸清樹。

③ことばの質問箱Ⅰ

「敬語の指針」に直接かかわる事柄について一問一答形式で解説しています。前半は「敬語の指針」そのものについて，文化審議会国語分科会委員及び敬語小委員会ワーキンググループ委員として答申に携わった東京大学教授・菊地康人氏に解説していただきました。後半は学校教育での「敬語の指針」の活用や指導等について，文化審議会国語分科会委員として携わった目黒区立第八中学校長・松村由紀子氏に解説していただきました。

④ことばの質問箱Ⅱ

敬語に関するさまざまな疑問について一問一答形式で解説しています。誤りやすい敬語の使用実態とその背景はどうなのか，敬語に関する意識はどう変化しているのか，方言にはどのような敬語が見られるのか，英語や韓国語など外国語の敬語は日本語の敬語と比べどうなのか，などについて解説しています。

⑤巻末資料　文化審議会答申「敬語の指針」（抄）

「敬語の指針」を資料として掲載しました。なお，紙幅の都合で「第３章　敬語の具体的な使い方」は割愛しました。「敬語の指針」は文化庁ホームページで閲覧・ダウンロードができます。

（尾崎 喜光）



『日本語ブックレット2006』 http://www.kokken.go.jp/nihongo_bt/

Webブラウザで閲覧できます。また，PDF版をダウンロードして閲覧することもできます。

『日本語ブックレット』は，日本語に関する動向や資料を分かりやすい形で広く提供することを目指し，平成17年度より毎年，電子版として定期刊行しています。



今回刊行した『日本語ブックレット2006』は，平成18（2006）年の日本語をめぐる動きをまとめたものです。図書，総合雑誌記事，新聞記事といった３種類の資料をもとに，第１部＜動向＞では日本語をめぐる状況の記述を，第２部＜文献目録＞では日本語関連の図書・記事のデータを掲載しました。

なお，第１部では，３種類の資料それぞれについて，2006年１年間の状況・傾向を全体的に記述し（**概観**），その中から**トピック**を取り上げて，より詳しく述べています。さらにそれぞれのトピックに関係する図書や記事の情報を，第２部のデータから抽出して，**関連文献情報**として示しました。また第２部の**文献一覧**では，３資料の文献データを一覧することができます。同じく**文献検索**では，2007年3月に刊行した『日本語ブックレット2005』の文献データと併せて，２年分の３資料のデータを横断的に（または，資料を選択して）自由に検索することができます。

それでは，実際に2006年の動向としてどのような点が注目されたかを，第１部で見ていきましょう。

前年の2005年は，前半は日本語関係の本２タイトルがベストセラー上位に名を列ね，夏には若い世代の「方言ブーム」がマスコミで注目され，秋にはテレビで言葉に関するクイズ番組が一斉に始まるなど，日本語に関する話題が絶えない年になりました。それに比べると，2006年はこの点については「静かな年」であったといえます。

まず**図書**では，国語教育の重要性にもふれた，藤原正彦著『国家の品格』（新潮社）がベストセラーになりましたが，言葉そのものについて論じたベストセラーは生まれませんでした。その一方，辞書をめぐっては，書籍体の辞書とウェブ上のサービスの連動や，情報をウェブ上などで一般から募集するという辞書への一般参加，さらにウェブ上の一般参加型百科事典『ウィキペディア』が大きな注目を集めるようになるなど，いくつかの新しい動きが見られました。



総合雑誌記事では，早期英語教育の是非や，学力低下への対応策をめぐる教育論議の中で，国語教育・国語力の重要性が説かれることが多くなっており，その立場に立つ藤原正彦氏が各誌に登場しています。インターネットとテレビという新旧の代表的マスメディアと言語生活の関連についての記事も見られます。また日本語に関する記事を掲載する特集は，44タイトルが組まれました。

新聞記事では，小学校での必修化やセンター試験でのリスニングの導入といった英語教育をめぐる状況，「ゆとり教育」からの転換など教育の見直しと「言葉の力」への注目，「手書き」本の人気や「ケータイ小説」の成長といった出版・読書状況，在日外国人への日本語教育をめぐる状況，国際放送の強化などマスメディアでの動き，文化審議会の審議に関連した敬語に関する話題などに関する記事が目立っています。

この『日本語ブックレット』が日本語に関する情報源の一つとして皆様の言語生活に役立つものとなるよう，今後さらに改良を重ねていきたいと考えています。

（新野 直哉）

公開研究発表会報告

『生活日本語』の学習をめぐって－文化・言語の違いを超えるために－

■「生活日本語」とは？

去る１月26日（土），国立国語研究所２階講堂において，「平成19年度　公開研究発表会」が開催されました。

近年，日本国内に在住する外国人の中には，進学・就職など特定目的のためではなく，「生活のために」日本語を学んでいる人々が増えてきています。例えば，日本人の配偶者として来日する人々などがそれにあたります。また，就労や勉学のために来日した人々にも，「仕事や勉強以外の日常生活をより充実したものにしたい」という気持ちはきっとあることでしょう。「生活のために必要な日本語の力とはなにか」，「その力はどのようにして伸ばせるのか」，「外国人と日本人とが，日本語を使ってお互い心豊かに暮らしていくために，日本人側として何ができるのか」，ということが，いま日本社会において問われています。

国立国語研究所　日本語教育基盤情報センターは，現在「生活のための日本語」，つまり「生活日本語」の学習をめぐる調査研究を，さまざまな角度から進めています。今回の研究発表会では，日本語教育基盤情報センターの４つの研究グループがそれぞれ何を目指し，何を明らかにしようとしているのか，これまで何が明らかになってきたのか，ということを提示しました。さらに，所外の教育者・研究者の方々との対話を通じ，「生活日本語」についての議論を深めました。

■ 発表会の構成

発表会ではまず，センターの四人のプロジェクトリーダーが，それぞれのグループの研究内容について口頭発表をおこないました。その後，お二人のコメンテーター（西原鈴子氏，才田いずみ氏）を交え，質疑応答を含めたディスカッションがおこなわれました。

口頭発表の内容は，以下の通りでした。

（１）「生活のための言葉：国内外先行事例から学ぶこと，実態調査から明らかにすること」（金田智子）

日本で生活するために必要となる日本語とは何かを探り，生活者にとって必要な「学習項目」の一覧を作成するために，このグループでは国内外での先行事例を調査しています。発表ではそれら事例の比較対象の結果を紹介し，併せて今後研究所で実施していく独自調査の方針について述べました。

（２）「評価の『ゆらぎ』を問い直す：評価観・評価プロセスを探る研究」（宇佐美洋）

日本人と外国人とが，日本社会の中でよりよく付き合っていくためには，外国人の日本語運用が，教師ではない，ごく普通の日本人によってどのように評価されているのかを知ることが必要になります。本発表では，日本人評価のあり方を，その評価プロセスのバリエーションも含めて明らかにすることが必要であることを述べるとともに，今後は日本人自身も自らの評価観を問い直すことが求められていくことを論じました。

（３）「よく分かる日本語辞書とは」（井上優）

現行の辞書の意味記述は，母語話者の視点でなされていることが多く，非母語話者にとっては決して分かりやすいものにはなっていません。非母語話者が日々の生活の中で日本語を理解・産出していくため，ほんとうの意味で役に立つような辞書記述とはどのようなものか，ということについて論じました。

（４）「日本語教育データベースの構築：その課題と可能性について」（野山広）

日本語教育基盤情報センターでは，日本語教育研究の「基盤」となりうる各種情報を集積し公開する「日本語教育データベース」の構築を計画しています。本発表では，そのデータベースの基本理念を示すとともに，データベースに搭載される予定のデータ例を示し，その利用の可能性などについて論じました。



ディスカッションの場面

発表会には，講堂がほぼ満員となる，約150名の方々が参加してくださいました。さまざまな質問やご意見をいただくことができ，「生活日本語」というテーマに対する高い関心をうかがうことができました。

（宇佐美 洋）

コラム

現代日本語の確立過程を調べる

言葉は時代とともに変化します。現代日本語の確立期にあたるこの百年ほどの間にも大きく変化してきました。

現代における適切な言葉づかいや今後の国語政策のあり方を考えていくうえでも，現代語が確立してきた過程を調査することは重要です。

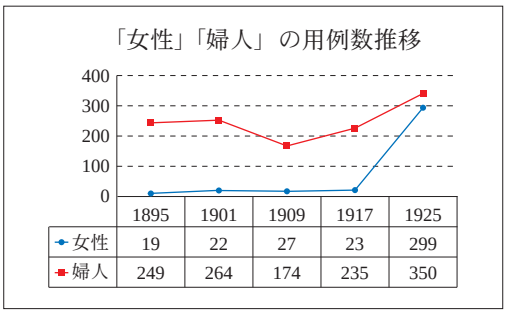
「コーパス」を利用する

言葉の変化を調べるためには，古い時代の資料から用例を探し出してどのように使われていたかを見ていく必要があります。そのために，以前は，多くの本や雑誌をしらみつぶしに調査するようなたいへんな労力が必要でした。

しかし最近では，「コーパス」とよばれる，コンピューターを使った大規模な言語資料が用いられるようになってきています。国立国語研究所では，「太陽コーパス」という現代日本語の確立期の資料を作成し，2005年に刊行しました。これは，明治・大正期に広く読まれた総合雑誌『太陽』の1895（明治28）年から1925（大正14）年までの記事から，約1250万字分を検索できるようにした日本語データベースです。「太陽コーパス」を利用すると，この時代の言葉の変化の様子を比較的簡単に調査することができます。

「婦人」と「女性」

ここで，「太陽コーパス」の利用例として，「婦人」と「女性」という言葉について見てみたいと思います。次のグラフは，それぞれの用例数を年ごとにまとめたものです。



	1895	1901	1909	1917	1925
女性	19	22	27	23	299
婦人	249	264	174	235	350

大正時代の終わりになって「女性」の使用が飛躍的に延びたことがわかります。「婦人」の用例数も増えていますから，『太陽』の記事の中で“成年女子”が取り上げられること自体が増えたことも影響していると考えられます。

それ以前には「女性」はわずかしか使われていませんが，少ない用例の中には「にょしょう」と読むものが含まれています。「にょしょう」が「じょせい」として定着するのは，明治の終わりから大正にかけてだといわれています。

この後，「女性」の方が「婦人」よりも多く使われるようになって現代に至ります。現代語では「婦人」は，「婦人服」などの複合語や「婦人画報」のような固有名詞に残っていますが，“成年女子”を表す言い方としてはあまり見かけなくなりました。

「拉致」という言葉

今度は，「拉致」という言葉を見てみたいと思います。この言葉は，「無理矢理連れて行く」という意味で，今日広く使われています。しかし，それほど昔から使われていた言葉ではなく，古い用例は多くありません。

この言葉は，「太陽コーパス」では13例使われていました。そのうち11例までは政治関連の記事で，「他の政党の議員を自分たちの政党に拉致する」や，「門戸を開いて政治家の資質のある人を拉致する」などという文章の中で使われています。ほかには，「天下の学者を皇帝のもとに拉致したので，多くの優秀な人物でいっぱいだった」という例もあります。（用例の原文の文語文を現代語訳しました。）

こうした用例を見ると，どうやら当時は必ずしも強制的なものではなく，「連れてくる」「招き入れる」といった意味だったようです。少なくとも，現代語で見られる「誘拐する」というような意味合いはありません。後の時代に「無理矢理」という意味が強くなっていったものだと考えられます。なお，大正ごろまでは読み方も「らっち」が普通だったようです。

このように，コーパスを利用することにより，珍しい用例を集めて意味の変化を調査することも可能になりました。

言語コーパス整備計画

国語研究所では「言語コーパス整備計画KOTONOHA」を推進しています（「太陽コーパス」もその一角に位置づけられています）。現在は大規模な「現代書き言葉均衡コーパス」に取り組んでいるところです。この計画が進めば，現代語の確立の過程についても，用例に基づいた詳細かつ正確な調査が容易に行えるようになるはずです。

（小木曽 智信）

このコーナーは国立国語研究所所員が書いた文章を発行元の許可を得て転載するものです。
『文化庁月報』平成19年10月号「言葉を見つめて」より転載（一部加筆）。

文字さんぽ

戸籍の電算化と漢字

戸籍に使うことができる文字は，法務省民事局長通達によって決められています。具体的には，常用漢字，人名用漢字，漢和辞典に載っている文字などです。子どもが生まれると名前をつけますが，このときには常用漢字と人名用漢字の中から文字を選ばなくてはなりません。わが子の名前にこの文字を使いたいという希望は多くあって，昭和26（1951）年以降，人名用漢字は徐々に増えてきました。平成16（2004）年に488文字を人名用漢字に追加したのは記憶に新しいことです。名づけに使える漢字は，現在2,928文字です。

しかし，戸籍には，いわゆる下の名前だけでなく，苗字や住所も記載されます。そのため，常用漢字と人名用漢字の「名づけの漢字」だけでは足りません。例えば，「椙」は苗字にも地名にも使われますが，常用漢字でも人名用漢字でもありません。そこで，そのような文字を扱うために，漢和辞典に載っている文字ならば許容というルールができたのでしょう。そして，戸籍事務の世界では，漢和辞典に載っていない文字は「誤字」として扱われます。

さて，明治以来，戸籍は紙の上に手書きやタイプライターで記載してきました。しかし，この方法では，作成・修正・証明書発行に時間がかかり，事務効率が悪いものでした。そこで，平成６（1994）年に戸籍法の一部を改正し，戸籍事務の電算化（コンピュータ処理）を可能にしました。事務処理のスピード化と，窓口サービスの向上が目的です。

これを受けて，各地方自治体では，戸籍事務を電算化するために，紙の戸籍をコンピュータに入力する作業が進められています。紙の戸籍では，行書や草書，あるいは書き癖などで，漢和辞典とは異なる字形，つまり戸籍事務の世界での「誤字」で記録されていることが少なくありません。そこで，戸籍をコンピュータに登録するに当たり，「誤字」を改めることが行われています。「誤字」を改める場合は，自治体から本人に通知して同意を求めます。また，書きかえられる「誤字」の例（図参照）をWebページに掲載し，住民に協力を求めている自治体もあります。



図：書きかえられる「誤字」の例

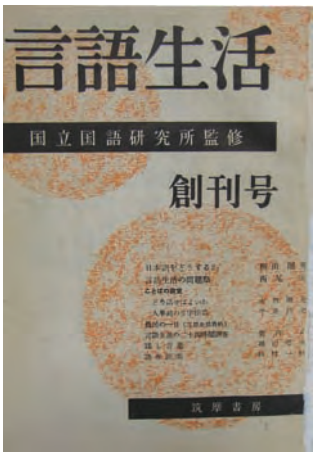
名前の文字にはこだわりがあると言われています。けれども，コンピュータの時代だから仕方がないと，文字の書きかえに応じた人のほうが，はるかに多数を占めるようです。

（高田 智和）

表紙のことば

国立国語研究所は，昭和23年12月20日に発足しました。昭和25年には第１回公開講演会を日本医師会館講堂で開催しています。巻頭の写真はそのときの案内ポスターです。当時の研究所は，庶務部と２研究部で組織され，国語の学力設定調査や婦人雑誌の語彙調査が始まった頃です。各地の方言研究者を地方研究員とする全国的な方言調査や福島県白河市，山形県鶴岡市での言語生活の実態調査も行われています。また，昭和26年10月には国語研究所監修の月刊雑誌『言語生活』が筑摩書房から創刊になりました。

（普及広報担当グループ）



お知らせ

国立国語研究所ホームページで，広報紙「国語研の窓」の記事や，「ことば」フォーラムの配布資料・当日記録・開催報告などを読めるようになりました。

「国語研の窓」の各記事をweb上で，また，PDF版をダウンロードして読むことができます。

「ことば」フォーラムのページでは，従来の開催案内に加え，当日の配布資料と発表・ディスカッション等の記録をPDFで読むことができます。開催報告については，「国語研の窓」のwebページでご覧になれます。

現在掲載しているのは一部ですが，その他の号・回の資料は準備が整い次第，順次掲載する予定です。



「国語研の窓」のもくじ



「ことば」フォーラムの開催報告



「ことば」フォーラムのテーマ一覧



開催案内，配布資料・当日記録

国立国語研究所が立川市に移転して3年が経過しました。移転当初は周囲に建物も少なく，少し寂しい環境でしたが，現在では，新たに移転してきた機関もあり，周囲の環境も変わりつつあります。



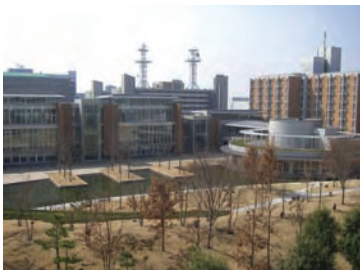


国文学研究資料館
（平成20年に移転・国語研屋上より撮影）

←国文学研究資料館の建物内に，今後，統計数理研究所，国立極地研究所（いずれも平成21年移転予定）が入る予定です。

建物の東側では，東京地家裁立川支部（仮称）の工事が始まりました。

まだ青いビニールシートに覆われています。



自治大学校
（平成15年に移転・国語研屋上より撮影）

↑自治大学校は国語研究所より早く立川に移転しました。

新　刊

新「ことば」シリーズ21『私たちと敬語』

2008年3月／ぎょうせい／A5判横組み128ページ／税込500円（3ページに紹介記事があります）

©2008　国立国語研究所